

唯(敬語法説)の例外としてRoyal inscriptions from Ur I col. VI
(2-7)

En-te-me-na ensí-Lagaš^{ki}-gé^d. En-IiI-é-ad-da-ka-ra sir
-e-na-du(ラガシュのエンシ、エンテメナがエアダのエンリルの為に(土地を)分割した)
を認めなければならない。勿論(神)に対する行為としてよりもエンテメナ自身の行為に表現
点が置かれたと考えれば首肯出来る表現ではあるが。

結 び

先述せる如くprefix mu-の機能はi)目下の者から目上の者への尊奉的語法(……し奉
る)であり又ii)書記(dub-sar)又は碑文建造者より見て目上の人物(又は神)の独立的
行為(……し給う)を表現するのが原則であるが、iii)目上の人に対する尊奉行為よりも
目下の人物の行為自体に表現点が置かれる場合はmn-の代りにe-が用いられた。

prefix e-がi)目上の人から目下の人への行為であり又ii)目下の人若しくは身分
卑しき人物や敵性の人物、更には動物、無生物の目上の人物に関与しない独自の行為を表現する
卓語法的表現が原則でありiii)目下の人に対する行為としてよりも目上の人自身の行為に重
点が置かれる場合はe-の代りにmuが用いられる事及びこの表現点の(ずれ)がグデア時代
以後一般的になる事は既に触れた所である。

なお終に臨み、貴重な書籍を長期に亘ってお貸し下さった上、乱雑な原稿を通読下さり色々と
有益な御教示を戴きました中原与茂九郎先生に厚く感謝の意を表します。

アラビア文献に頼れた

ファールスのクルド族に就いて

清 水 誠

言うまでもなく西アジアの景観は貧しい沙漠とその中に点在するオアシスであつて、そこには
利害を異にする農民と遊牧民がオアシスを舞台に葛藤を繰広げ、時には遊牧部族間で牧草地をめ
ぐる粉争が起る。しかも農民と遊牧民とが民族的に異なる場合、その争いは深刻となる。また遊
牧民は機動性に富み、非常に好戦的であるので、西アジアにおいて帝国の支配者となる者にとつ
て、若しこれをうまく懐柔すれば、自己の強力な軍隊とも為し得たのであるが、さもない時は支
配者はいつの時代でも対遊牧民政策に苦慮しなければならなかつた。現在に至つても尚西アジア

の各政府はこの悩を大なり小なり持つている。こうした事情はイラン高原の歴史にその典型を見ることが出来る。私はこの小論の中で、イスラム征服時代に脚光を浴びたフェールス地方のクルド族(kurd)がその後サラセン帝国内でどのような状態にあつたかをアラビア文献の中から模索したい。

一般的にクルド族はイラン系の一民族だと言われている。しかし実際のところ彼等に関するイスラム以前の資料が少なく、これには尙問題が残されているように思う。kurdistan^①を含むザグロス山脈はアーリアン系やトルコ系といった東北方系の民族とアラブ系などセム系即西方系民族の言わば吹き溜りであつて、この山脈中には有史以来種々雑多の民族が移り住んでいる。従つてクルド族の起源を定める場合にも現在のクルド語の言語系統を最大の根拠とすることに一沫の危懼を感じるからである。アラビアの歴史家Mas'ūdīはその著Mūruj adh-Dhahab wa Ma'ādin al-Jauhar^②の中でクルド族のために紙数を割いているが、その当時既にクルド族の起原について様々な議論があつたらしく、意見の一致しないことを述べてその数説を挙げている。それには「太古に彼等を圧迫したある事情の為にアラブ族と離れて山谷に居を定めしかも外国人やペルシア人の居住地近くに住んだ為、クルド族は自らの元来の言葉を忘れて外国語を使うようになった。それでこの諸部族は各々クルド語方言を持つている」とか、「〔南アラビア系の〕Ghassan 朝と争つて古代に分れた」とか、上記二説を折衷し、「水や牧草を求めて山に引き籠り、異邦人と接触してアラビア語を忘れてしまつた」といつたアラブ系説やDa-hhākとAfridunとの伝説に結びつけた説も含めたペルシア系説などがある。或は彼等はダビデの子ソロモンの女奴隷の出だとする実しやかな説もある(Maçoudi, Prairies d'Or, III, p 249-252^③)。いずれにせよクルド族がどうしてザグロス山中に住むようになったかを説明するのは共通で、クルド族が所謂山嶽民族であることを論証している^④。

Mas'ūdīは更に前著及び“Kitāb at-Tanbīh wa'l-Ishrāf”の中でクルド族の分布及びその部族名を列挙しているが、後者に彼等の居住地の一つとしてフェールスを挙げている(Maçoudi, Prairies, III, p 253-4, //; Tanbīh, p 88-90)。現在フェールスにはクルド族は居ないと言われている。後述するように以前クルド族の遊牧地であつたところは今は殆んどKhamseh 族やQashqā'ī族に占拠されている。前者はトルコ・アラブ系で、後者はトルコ系だと考えられている^④。だがイスラム征服時代以後もここに相当数のクルド族が存在したことは明らかであるが、何時頃迄居たかは明白でない(E. I. art. on “Kurds” by V. Minorsky.)。

イスラム征服時代カリフ・オマルの治世の最後の年即ち回曆23年(644 A. D.)に、ニ

ハーヴァンドの戦以来勢に乗ったアラビア軍がフェールスのクルド族を討伐したのは有名な史実である。同年だがこれより少し前、Tabari の年代記に

「〔アラビア軍の武將〕 Sāriyah b. Zunaim は〔ペルシアの〕軍隊に出会わんとしと Fasā と Darābjird へ進攻した。神の御旨によつて彼は彼等に出会い、包囲した。そこで彼等は援軍を求め、フェールスの諸クルド族はこどもも彼等に連合した」(Tab. I (5), p 2700)

とある様に、クルド族がペルシア軍を助けてアラビア軍と戦つた時の報復の意味も含めてこのクルド討伐が為されたと思われる。西暦12世紀初頭の書であるが、Fārs Nāmāh にサーサーン朝時代フェールスのクルド族はペルシア軍隊における重要な要素を為していたと述べているが、(F. N. p 168. cf. G. De Strange, Description of the province of Fars in Persia, A. S. Mono. XIV p 13)、恐らくはこうしたことを指すのであろう。即ち彼等は所謂正規軍ではなかつたにしても、一旦何事か起れば出動してペルシア軍の強力な一員になつたと思われる。

さてアラビア軍によるクルド討伐についてはTabari の回暦23年の条に、「Salamah b. Qais al-'Ashja'ī とクルド諸部族(al-'Akrād, pl) との消息の記述」という表題を付されて述べられている。

「……………〔アラビアの〕軍隊が彼〔信徒の長 °Umar b. al-khattāb〕のとこりに集り Salamah b. Qais al-'Ashja'ī は彼等を励まして言つた。「アッラーの御名に於いて行け。聖戦に、アッラーを否定せし者と戦え。お前達の敵、異教徒に遇えば、彼等に三つの徳目を勧めてイスラム教に導け。若し彼等がイスラム教徒となり、尚己が住居を選べば、彼等には財産に応じた救貧税(zakāt)が課せられ、彼等にはイスラム教徒の戦利品(fai')の分前はない。若し彼等が〔戦士として〕お前達と共にあることを選べば、彼等にはお前達と同じものが与えられ、彼等にはお前達と同じものが課せられるであろう。若し彼等が〔イスラム教徒になることを〕拒絶すれば、彼等に租税(kharaj)〔の貢納〕を説得せよ。若し彼等が租税〔の貢納〕を認めるならば、假令彼等が、その前方の彼等の敵と戦つていたにしても彼等に租税〔貢納〕の為の猶豫を与え、彼等にその能力以上を要求するな。若し彼等が〔租税貢納を〕拒絶せば、彼等と戦え。実にアッラーは彼等に逆つてお前達の助者たらん。若し彼等が城中に立籠りながら尚お前達に“如何にすればアッラーの智徳とその使徒の法智にあずかり得るや”を尋ねても、彼等をアッラーの法智に降すな。実にお前達は彼等がアッラー及び使徒の法智に備するやを知らず。又お前達に“如何にすればアッラーの被護(dhimmat)と

使徒の被護にあづかり得るや”を尋ねても、彼等にアッラーの被護と使徒の被護を与えるな。

お前達自身の被護を与えよ。仮令彼等がお前達に挑んでも、子供を突き刺し、裏切り、見せしめにしたり、殺したりするな』と……………」(Tab. I (5), p2713-4)

結局クルド族はいずれをも拒絶したので、戦闘が行われ、アラビア軍は種々の分捕品を集めたと言う。これは壘戦の事情を物語っていて面白いが、所謂コーランか剣かの二つの道だけでなく、剣を取る前に租税貢納を求め、又剣を取つてからでも相手の出方次第で、彼等を *dhimmī* 即ち被護民とする余地を残している。ところでこの討伐の際、クルド族がどの程度の打撃を蒙つたかは *Tabarī* の記述によつても明らかでない。*Tabarī* はただ戦勝後のアラビア軍側の後日談を載せているだけで、*Fārs Nāmāh* はこの征服戦争の際、クルド族の戦士達は皆滅びてしまつたが、唯一人 *Alak* だけはイスラム教徒となつて子孫を残したという伝承を伝えている (*F. N.* p168, *G. Le Strange, Description*, p13)。この伝承は誇張が過ぎているが、相当多数のクルド族が減びたり、或は他地方に逃亡移住したのであることが窺われる。併しここでいずれも10世紀後半の地理学者であるが、*Iṣṭakhrī*, *Ibn Hauqal*, *Muqaddasī* 等の著述に注目しなければならない。この三地理書ともファールス地方に居住するクルド族として3部族 (*haiy:pl. ahyā*) の名を列挙している (*Iṣṭ.* p114, *I. H.* p270 [186], *Muq.* p446) ^⑤。しかも *Iṣṭakhrī* も *Ibn Hauqal* も此等の諸部族が一部分即ち有名なものだけで、部族の全てを知るには救貧庁 (*Diwān as-Sadaqat*) に拠らねばならないと言ひ、又「彼等は100部族に増加していると言われている」とも述べている。 (*I. H.* p271 [186-7], cf. *Iṣṭ.* p115, 99, *I. H.* p265 [180])。但し、三地理書に掲げられた各々の部族名に多少の相違があるのは仕方がないとしても、この3部族を含めて100部族全てがクルド族であつたかどうか非常に疑わしい。*V. Minorsky* はファールスのクルド族は *Kurdistan* の部族よりもかなり異つていたらしいと言われているが (*E. I. art. on "Kurds"*)、どうも当時ファールスに居住していた遊牧部族は一括してクルドとされたらしい形跡がある ^⑥。とにかく彼等が諸系統を含んだ混合の部族であつたにしても、いずれも似たりよつたりの生活様式を持つていたようである。*Ibn Hauqal* や *Iṣṭakhrī* は更に彼等に関して次の様に記している。

「彼等は500,000戸 (*baīt*) に増加しており、一部族から多かれ少かれ1,000人の騎手 (兵) (*fāris*) が出る。彼等は冬場 (*mashtā*) と夏場 (*maṣīf*) に牧草を求めるが、ごく一部は寒地帯 (*surūd*) に〔残つて〕居る。暖地帯 (*jurūm*) ^⑦ の人々は〔長距離の〕移動をしないで、彼等に属している地域 (*nāhiyah*) 内であちこちと遊牧している。

彼等は軍備(ʿuddat)と男達の勇氣と力を持ち、dābbah 馬とkurā^o馬を持つている。こうしたことはスルターンが彼等を平野に定住させ(或は危害を加え)ようとしたり、圧迫しようとしたりする際に、スルターンにとって彼等を支配することを困難ならしむるものである。……彼等は羊や種馬(rama'kat)の持主であるが、駱駝は少ない。クルド族はIṣ-bahānの境域に移動するBāzanjān〔族〕以外は駿馬(khail^oirāqi)を持っていない。彼等のdābbah馬はbirdhawnとかshihriとか言う馱馬である。また彼等は美しい環境に住み、裕福に暮している。財産と牧草を求めることにおける彼等の信条はアラブ遊牧民やトルコ遊牧民と同じである」(I. H. p271〔186-7〕. cf. I st. p115)。

この記述は当時フェールス地方に居住した遊牧民の事情を伝えて極めて興味深い。「冬場と夏場に牧草を求めるが、ごく一部は寒地帯に残っている」とあるのは彼等が遊牧のみに頼らず農耕をも行っていたことを示すもので、夏場から冬場に移動する際、寒地帯の夏場にある農耕地に従事する者を残しておくのである。これは現在フェールスに居住する遊牧民の慣習と全く同じである。(A. K. S. Lambton, Landlord and peasant in Persia, p281)。これに関しては後にもう少し詳しく述べたい。上記引用文中「戸」^⑧と訳したbaitは家族を意味すると思われるが、別に

「一戸から〔家〕長('arbāb, pl)や勇士('ajrā', pl.) (又は召使'ujarā')や羊飼(ri'ā', pl)及び1人乃至10人位になる彼等の従者(atbā', pl)が出る」(I. H. p 265〔180〕. I st. p 99)

と記されている。'arbābの前には部分冠詞的なminが付されているので、家長や勇士や羊飼とか従者等全てが一戸には必ず居たとは限らず、色々な場合があつたであろう。いずれにせよ500,000戸と言うのが仮令誇張であるとしても相当多数の人口が居たことは確かで、しかも彼等が騎兵による軍隊を擁して政府を苦しめたことが知られる。

では一体此様な多数の諸部隊がどのような形で統合され、それらがカリフ政権や地方政権と如何なる関係を結んでいたかに就いて論を進めたい。

アッバース朝時代に記された地理書の多くはフェールスのクルド族が居住乃至は遊牧する地域としてzamm 或はramm(複数形zumūm: rumūm)を挙げ、多かれ少なかれこの為に一項を設けている。しかし種々の文献や同一のテキストでも各版本によつてこれがzammであつたり、rammであつたり、或はzummmとするなど、オ一子音と母音符号の付方がまちまちである。少し本論から逸れるかも知れないが、暫くこの語そのものを見当したい。ヨーロッパでテキストとして発行された年代順に従うと次表の様になる。

発行年	editor	text	名称	異本
1861	B. de Meynard	仏訳 Yāqūt	ramm	
1865	"	Ibn Khordadbeh	"	z +mm
1867	F. Wüstenfeld	Jacut	"	
1870	M. J. De Goeje	I ṣṭakhri	"	z a mm
1873	"	Ibn Hauqal	"	"
1879	"	al-Muqaddasī	"	
1885	"	Ibn al-Faqīh	zumm	
1889	"	Ibn Khordadbeh	"	r +mm
1879 1901	"	aṭ-Ṭabarī	zamm or zimm	r +m +y
1894	"	Maṣūdi , Tanbih	zumūm	
1921	Strange & Nicholson	Fārs Nāmah	r +mm	
1927	M. J. De Goeje	I ṣṭakhri. 2nd ed.	1st ed.	に同じ
1939	J. H. Kramers	Ibn Hauqal.	z +mm	

アラビア文字の特徴で別にこの語に限ったことではないが、点の有無、母音符号の付方で幾通りにも読み、我々にとつて煩雑極まりない。上記文献の中で著者自らが綴字や発音を明示しているのは Yāqūt (Jacut) のみである。彼はこれを rā の系列に入れた上で、「ramm. 才1字は〔母音符号 a〕 fatha を付し、才2字は〔重複記号〕 shadda を付す。複数形は rumūm) とだけ記して同じ意味で違つた綴字のあることは述べていない。M. J. De Goeje もこれを何と訓読すればよいか悩んだらしい。彼の刊行した Bibliotheca geographorum Arabicorum の IV 卷 (即ち I ṣṭakhri, Ibn Hauqal, Muqaddasī の語解と索引) p 250 の glossarium に於いて、ramm として、「I ṣṭakhri, Ibn Hauqal の全写本は z +mm となつている。但し Muqaddasī の写体では Jacut と同じく r +mm である。r +mm は “人の群”、“軍隊” を意味するペルシア語の ram もしくは ramah と同一であると考えられ、この r をアラビア人達は誤つて z とした。何となれば恐らくクルド語で部族 (ḥaiy) を意味する jūmhā の音の影響を受けて z +m とした」と以上のように述べている。これに拠つて De Goeje は I ṣṭakhri と Ibn Hauqal を刊行する際、殆んど

Goeje が自ら付したのか、写本そのものに付されていたのかはつきりしないが、写本の中には部分的ではあるが母音符号を付されて zamm となつている個所もあつたらしい。併しこの説には無理があり、彼自身確信が持てなかつたらしい。その後 B. G. A. VI 卷の Ibn Khordābeh の訳中 (p33) の脚注において前説の ramm を誤りとし、それはクルド語に zūmah (前説では jūmhā 又は jūmah) とあるからだと変更している。それで彼は B. G. A. V 卷の Ibn al-Faqīh 及び Ibn Khordābeh では zumm とし、又複数形のみであるがⅧ卷の Masūdī では zumūm として刊行した。しかしこの説は学者の間で全般的に認められていない。最近自著の改訂版を出した R. Levy は zumm を記しているが (The Social Structure of Islam, p382)、V. Miorsky は zūmah (zōma) から複数形の zumūm を生じ難いとして尚ペルシア語の ramm を主張し (E. I.), Le Strange は De Goeje の説を受継ぎながら zamm (The Land of the Eastern Caliphate, p266, footnote)、G. R. Driver も zamm を掲げている (J. R. A. S. 1921, p569)。クルド族に関する数多の論文を發表されている R. Driver は何故かこの議論を避けている。De Goeje の説は zamm をクルドの haiy 即ち部族と同一視することに基づいているが、後述する様にこれを同一に置くことは出来ない。しかも Yāqūt も「これはフェールスの方言である」(Jacut II, p821) と述べている様にフェールスにしか見出せないもので、^⑨Kurdistān にもこの語は存在しない。しかもこの言葉はいつの頃からか明確でないが既に死語になつている。De Goeje が言う zūmah がどの地方のクルド語で、何時の時代に亘つて用いられているか示されていないので関係を求めにくい。いずれにせよこの綴字及び発音を一般的な語義の単語と結びつけて解釈するには無理があると思われる。むしろこれがフェールスのみに存在すること、乃至はフェールスのクルド族に対してだけ何故これが成立したかその起原にまで遡らねばならないだろう。

現存するアラビア文献の中で — 恐らくは他言語の文献も含めて — 最も古く zamm を記載しているのは Ibn Khurdābih である。Ibn Hauqāl に、

「カリフという名で呼ばれている元首の、信徒の長 °Alī b. Abū Tālib や Umar b. al-Khattāb (彼等に神の祝福あれ) や両者以外の者との契約書 (‘ahd) を持つ諸 zamm の人々及び彼等以外の……」(I. H. p 303 [217], cf. Ist. p 158)

の記載がある。これは前の Tabarī に記されたクルド討伐と結びつく。残念ながら Tabarī も直接には zamm に触れていない。だがカリフ・オマルはクルド族の討伐後まもなく同回曆 23 年に殺されているから、上記の様なクルド族との交渉の端緒が開かれたのは数多の討伐戦の直後

と見なければならない。又征服戦争以前に既に *zamm* という言葉が存在したとすれば、*Ṭabarī* にもそのことが見えると思われる。此等から *zamm* はイスラム帝国確立期に成立したと推測される。又 *Ṭabarī* には複数形 *zumūm* を *dumūm* (末字の *r* は *m* の見間違いか: *Tab.* III (4) p 2182) とした異本のあることから、*zamm* は字体も発音も余り変らないアラビア語 *dhamm* (複数形 *dhumūm*) の影響を受けていないかが考えられる。*dhamm* と同一語原を持つ単語に *dhimmat* や *dhimmī* があり、*ahl adh-dhimmat* 即ち *dhimmī* はイスラム教徒の被護下に置かれる非改宗者特にキリスト教徒やユダヤ教徒を指す所謂被護民である。*dhimmat* は前に述べた様に *Ṭabarī* の記載に見える。*dhamm* は「非難」とか「悪徳」という意味であつて、*Fārs Nāmāh* に記されている様にフェールスのクルド族はイスラム軍に頑強に抵抗して改宗しなかつたことから、この *dhamm* が彼等に冠称されなかつたであろうか。これは単なる臆測に過ぎないが、実際クルド族は屢々山賊と同義的に見なされる程非難の対象になつたり、クルドが罵倒の代名詞にもなつている。例えば *Ṭabarī* には或人を罵る言葉に、「おゝ、クルドの幕舎に背つたクルドめ」とか、「おゝ、クルドの幕舎に背つた売女の小倅め」といつた句がある (*Driver, Studies in Kurdish History. B. S. O. S. vol II* p 499)。これによつても *zamm* と *dhamm* とを関係づけることも故なきことではないと考えられる。

さて *zamm* とは如何なるものか。*Ibn Khurdādbih* は「*zamm* の訳はクルド族の駐屯する所である」 (*I. Khu.* p 47) と述べ、同様に *Yāqūt* には「*zamm* の訳はクルド族の駐屯する所或は彼等の留まる所である」 (*Jacut II. p 821. III. p 836*) とあつて、*zamm* は言はばクルド族の遊牧場所或はその遊牧地区である。*Ibn Khurdādbih* はフェールスには此様な *zamm* が4ヶ所あると言ひ、*Istakhrī* や *Ibn Hauqal*, *Muqaddasī* は5ヶ所を数えている。此等の *zamm* 名は種々の地理書やその異本により呼称を異にするが、まぢまちで煩雑であるので *Istakhrī* の説に一定したい。

1.	<i>zamm Jīlawāih</i>	<i>zamm az-Zamījān</i>
2.	" 'Aḥmad b. al-Laiṭh	" al-Lawālijān
3.	" Ḥusain b. Ṣāliḥ	" ad-Dīwān
4.	" <i>Shahriyār</i>	" al-Bāzanjān
5.	" 'Aḥmad b. al-Ḥasan	" al-Kāriyān

(*Ist.* p 98-9, 113-4, 144-5, cf. *I. H.* p 264-5 [179-80], 269-70 [185-6], *Muq.* p 447, *I. Khu.* p 47 [*J. A.* 1865, p 55], *I. Fa.* p 203-4, *F. N.* p 168.

Jacut, II, p821-2, III, p836)

zammに関する情報を最も組織的に伝えているのは Iṣṭakhri と Ibn Hauqal である。両者によれば、此等の諸 zamm が相当広範囲の地域を占めていたことが知られる。例えば、

「az-Zamījān として知られる Jilawaih の zamm に就いて。それは Iṣbahān に接していて、一部を 'Iṣṭakhr kūrāh から取り、一部を Sābūr kūrāh, 'Arrājān kūrāh からとつている。そこからの四方の境界は al-Baiḡā', Iṣbahān の境域、Khūzistan の境域、Sābūr 地方の zamm のそれぞれに至る。町々や村々を含めて、この中にある全てはこの zamm に属する」(I. H. p269-70 [185]. I st. p113. cf. Jacut II, p821)

とある。その他の zamm についてもその区域が示されているが、これは省略するとして別葉の Ibn Hauqal の地図を参照されたい。

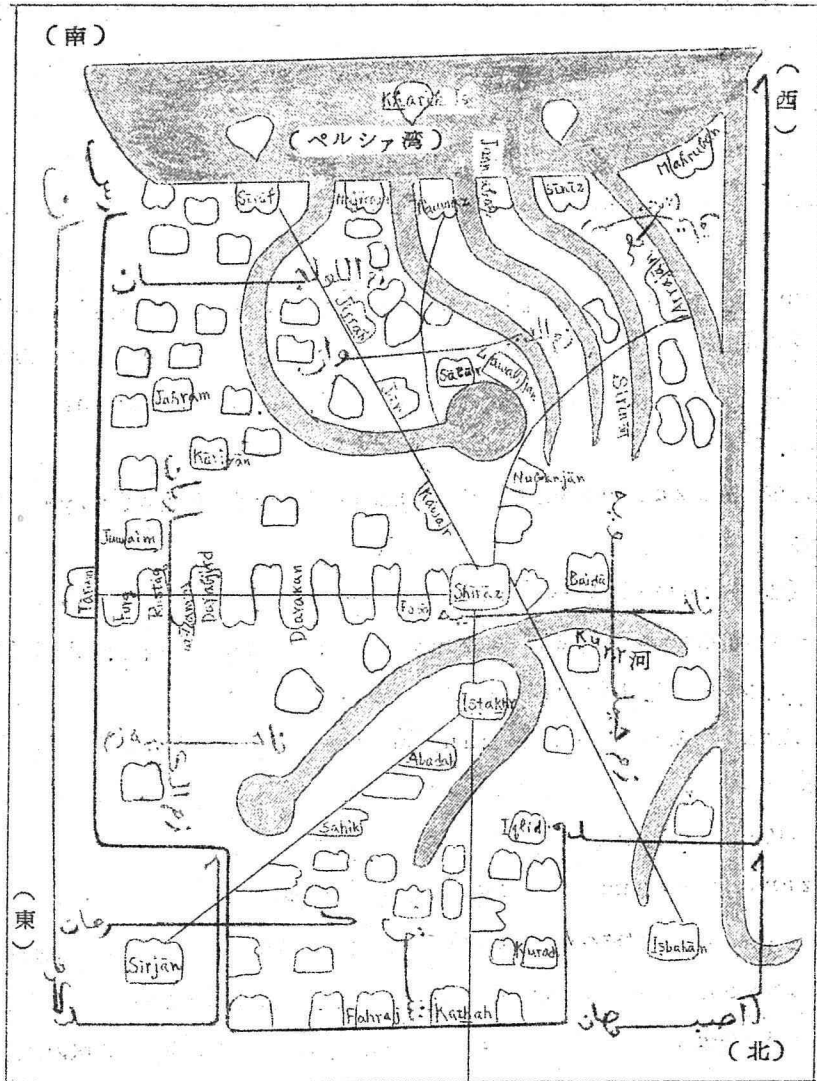
ファールスにはクルド系とされている遊牧部族が多数存在したことは前に知つた通りである。この多数の部族が大なり小なり部族連合の形を取つて 5 zamm に統合されていたと思われる。此様な zamm の形に初めて統合或はその祖型を再建し、各部族の所属すべき zamm を決定或はそれ以前の居住地をそのまま承認したのは誰か。私はこれをカリフ Umar b. al-Khaṭṭāb や ʿAlī b. Abū Ṭālib 等と考えたい。これに関連して次の記述は注目に値する。

「全ての zamm には共同体的な (muḡtamiʿāt) 町々や村々がある。クルド族の首長 (ra'īs) がその地区 (nāḡīyah) 全体の租税 (kharāj) の責任を負われ (dumminā), 又彼の地区の秩序の保全、隊商の [安全なる] 移送、道路の監視、彼の地区に御来臨せるスルターン^⑩の身辺の守護及びスルターンの命令の実行を強いられている」(I. H. p269 [185] cf. I st. p113. Jacut II, p821^⑪)

これに拠れば一定額の租税貢納を要求する代りに zamm 地区内の財政権即ち徴税権も兵権も全て首長に委ねられて、彼の自治に任されていたことが分る。これを換言して更に適確に伝えているのはファールスではないが同じくクルド族の町 Shahrazūr に関する Ibn Hauqal, Iṣṭakhri 等の記述である。

「Shahrazūr は小さい町である。そこでは既にクルド族が優勢である (主権を持つている)。……………この町にはスルターンの代理の総督 ('amīr) やこの町の諸財産に対する徴税官 ('āmil) が居ない」(I. H. p369 [263]. cf. I st. p200)

此様な支配形式は当時のイスラム社会に於いては言わば異例の処置であつたが、クルドのような遊牧部族を支配するには最良の方法であつたかも知れない。



フェールスの図 (Ibn Hauqal, 10世紀後半)

- nāhiyah zamm Jilawaih ——— نامیه زم جیلویه
 zamm al-Lawālijān ——— زم العولیان
 zamm ad-Dīwān ——— زم الديوان
 nāhiyah zamm al-Kāriyān ——— نامیه زم الکاريان
 rustāq Rīshahr (=zamm Shahrīyār) ——— رستاق رشهر

□ — 都市

次にもう少し zamm 内部のことを考察して見よう。前にも少し触れたが、彼等は遊牧民であると言つても牧畜のみを業としていたのではない。場所によつて異なるが、小規模ながら農耕にも従事していた。

「zamm al-Akrād (= zamm ad-Dīwān)。そこには rustāq と川がある。これは山の中にあつて、果樹園や椰子を所有し、果実や椰子実を持つている」(Muq. p 435)。

「zamm ziwān と Dādihīn と Dawwān。此等は Ardashīr Khūrah 管区の地区 (nāhiyah) で、全ては暖地帯にある。しかし Quhistān (或は山地) にある部分は気候が温和で、穀物が出来る」(F.N. p137. cf. G. Le Strange, Description. p43)。

これは暖地帯にある zamm の場合であるが、注目すべきは彼等が私領地 (diyā^o) を所有したことである。

「此等〔2つの zamm〕 al-Bāzanjān の一方はフェールスの管区にない。しかしそれはフェールスに私領地 (diyā^o) や村々を多く夥しく持つてる」(I.H. p270 [186]. cf. Ist. p113-4. Jacut II. p821)。

「Ishbahān の境域にある al-Bāzanjān はこの〔フェールスの al-Bāzanjān の〕 zamm の一派で、フェールスから移住したものである。併しながらそれはフェールスの境域に多くの私領地 (diyā^o) を持つている」(Ist. p145)。

この Bāzanjān の zamm はその本拠が Ishbahān 領内にあるにもかかわらず、管区を異にするフェールス内にも村落を含めた私領地を各地に多数所有している。これと同様のことがフェールスの各 zamm に就いても考えられる。この場合「多くの」とあるのは恐らくオアシスを中心とした農地全体或はその一部が私領地となり、各地のオアシスをその地区内に所有したことを意味する。この私領地は zamm の首長もしくは部族長の所有になるものと思われるが、これと似たケースが現在のフェールスの遊牧民にも見られる (A. K. S. Lambton, Landlord and Peasant. p283)。又 Ibn Hauqal や Istakhrī の各 zamm に関する記述の終りには「その中に耕つている町々や村々を含めてそこにある全てはこの zamm に属す」と記すのを常としている。zamm の広さから考えればこの「町々や村々」に居住しているのはクルド族ばかりでなく、多分にペルシア農民や商工業者等の町も含んでいたと考えられる。そうして別にクルド族はその地区の首府とも言うべき城市を持つていた。

「zamm Shahriyār。その町 az-Zamm 市」(Ist. p109. cf. I.H. p268)

(184) . Muq. p422-3)

「Dārābjirdからzamm al-Mahudī 市迄……」(Ist. p132. I. H. p 280 [201])。

或は代表的な城寨に、

「Tīn 山にal-Kāriyān 城(qal'ah)がある。Muhammad b. Wāsil が彼の軍隊と共にそれを改めたが、'Aḥmad b. al-Ḥasan al-'Azdī が既にそれを要塞化していたのでそれを制圧することが出来なかつた」(I. H. p272 [188] . Ist. p 117)。

尚'Aḥmad b. al-Ḥasan al-'Azdī はzamm al-Kāriyān の首長である(c. f. Išt. p141. 145. Jacut III. p 836)。

「zamm Ziwan 城(qal'ah)。これはGhundijān の近くにある堅固な城で、その地方を支配している」(F. N. p157. cf. Le Strange, Description, p73) 等の記載がこれを示している。そしてこの城市の城門には、

「その諸門に1000人から3000人の常備軍の居る諸zammの……」(Ist. p144) とある様に、常時軍隊がその守りを固めると共に、何らかの意味でいざという時に、すぐ軍隊を出動できるようになつていた。

彼等は此様に甚だ好戦的な性格を有していたので、いつもスルターンに服従していたわけではない。彼等は機会があれば叛乱を起し、或は地方豪族と結託して叛乱に参加したりした。例えばzamm az-Zamijān はzamm Jīlawaih とも言われる程その地区の吏上Jīlawaih の名声は高かつたが、

「……彼は彼の軍隊を動かして 'Abū Dulaf 家を襲撃して 'Abū Dulaf の弟のMa'qil b. Īsā を殺した。それから 'Abū Dulaf は Jīlawaih を迎え撃つて彼を殺し、彼の首を切捨てた」(Išt. p144)

と記されている。Abū Dulaf は本名をal-Qāsīm b. °Ijlī と言ひ、Išpāhan と Ḥamadān の中間にあるKaraj に一地方政権を為していた豪族である。ところがまもなく、'Abū Dulaf の孫のal-Ḥārīḥ b. °Abd al-'Azīz が反乱を起した際、このzamm は彼を援助している (Tab. III (4) p2182. A. H. 284)。zamm ad-Dīwān では

「彼等の首長はクルド族出身の 'Azādmard ibn Kūshihādh である。この王(malik)はずつと続いていたが、叛乱を起したのでスルターンは彼を襲とうとした。彼は Umān

に連れて、そこで死んだ」(Ist. p 145)

とある。zamm al-Kāriyān では、前に引用した様に、フェールスの豪族 Hanzalah 家の Muḥammad b. Wāṣil がフェールスに覇を唱え、Kāriyān 城にも攻めたが征服できず、次代においても、

「(zamm al-Kāriyān の 'Aḥmad b. al-Ḥasan の) 息子の Hijra b. 'Aḥmad はその zamm に今日迄反抗力と力との中にある」(Ist. p 141. cf. p 145) とある様に尚独立的地位を保っていた。又一方では、Ṭabarī の回曆 260 年の条に

「(Saffār 朝の) Yāqūb b. al-Laith の將軍達はクルド族の Mūsā b. Mahrān の zamm の人々 (ahl zammi) を襲撃した。Muḥammad b. Wāṣil に味方したからである。將軍達は彼等を殺戮し、Mūsā b. Mahrān は敗走した」(Tab. III (3) p 1890.)

と記されていて、Hanzalah 家の Muḥammad に組したが為に Saffār 朝に擧たれている。又 Fars Nāmāh には

「現在フェールスに群を為しているあちらこちらのクルド族は、°Adud ad-Dawlah 王が彼等を Isfahān の境域から連れて来たものである」(F. N. p 168. cf. Le Strange, Description, p 13)

とあつて、ブーヤ朝の英主 °Adud ad-Dawlah が多数のクルド族を Isfahān から強制移住させている。

此等の史料が伝える各 zamm の盛衰はそのまま中央権力の消長と結びついている。最初に立てられた中央政權との関係もアッバース朝が没落し始めるや、Istakhrī や Ibn Hauqal が「此等は恰も王国 (mamālik) のようである」(Ist. p 113. I. H. p. 269 [185]) と述べている様に、事実上独立国的な体裁を取るに至つた。しかし同時に今度各地に興り始めた地方政權と鎬を削る争いをしなければならなかつた。こうしてフェールスの遊牧地帯に於ける部族構成も幾度か変遷して行つたものと思われる。

〔主要資料及びその略号〕

I. Khu. = Abū al-Qāsim Obaidallah ibn Abdallah Ibn Khurdād-
(864) ḥbeh, Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik.

(B. G. A. V.) 1889. & Journ. A. 1865.

I. Fa. = Ibn al-Faqīh al-Hamadānī, Kitāb al-Buldān.

903) (B.G.A.V). 1885

Tab. = Abu Dja'far Mohammed ibn Djarir at-Tabari, Ta'rikh ar-

(923) Rusul wa 'l-Muluk. 1879-98.

Maç. = Abu l-Hasan 'Alī b. al-Husain al-Masūdī, Murūj adh-

(943) Dhahab wa Ma'adin al-Jauhar.

(Les Prairies d'or) 1861-77.

" , Kitāb at-Tanbih wa'l-Ischrāf.

(B.G.H.VII.) 1894.

Ist. = Abū Ishāq al-Fārisī al-Istakhrī, Masālik al-Mamālik.

(951) (B.G.A.I) 1870. 1927.

I.H. = Abū al-Qāsim Ibn Hauqal, Kitāb Sūrat al-ard.

(978) (B.G.A.II) 2nd ed. 1938-9. [数字] は 1st ed. 1873.

Muq. = Abū Abdallah Muhammad b. al-Muqaddasī, Kitāb Ahsan

(985) al-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālīm.

(B.G.A.III) 1879.

F.N. = Ibnu 'l-Balkhī, Fārs Nāma. (G.M.S.) 1921

(1107)

Jacut = Yāqūt ibn Abdallah al-Hamawī, Mujam al-Buldān.

(1225) (Jacut's Geographisches Wörterbuch) 1866-73. cf. B.

de Meynard, Dictionnaire Geographique, Historique

de la Perse. 1861.

(註)

① Kurdistān の名称は Seljūq 朝の Sanjar の時に始めて生れた。彼はペルシャとイラクの中間地帯に新に Kurdistān という州を設け、甥の Sulaimān Shāh に治めさせた。(G.R. Driver, The Dispersion of the Kurds in Ancient Times, J.R.A.S. 1921, p572)

② cf. Masūdī, Tanbih, p89, tr. par B.C. De Vaux, Le Livre de l'Avertissement et de la Revision, p128, I.H. p271 (187)

③ Masūdī 以後の著述家の挙げてゐるクルド起原説に関しては G.R. Driver, Studies

in *Kurdish History*, B. S. O. S. Vol. II. 1921-23. p493 参照.

④ A. K. S. Lambton, *Landlord and Peasant in Persia*, p159. 尚現在
フェールス地方に居る諸遊牧部族については D. A. Lane, Hajji, Mirza Ha-
sani-Shirazi on the Nomad Tribes of Fars in the Fars-Na-
mah-i-Nasiri. J. R. A. S. 1923. p 209-31 参照。

⑤ *Ist* p114, 8-115, 3.

Fārs におけるクルドの諸部族について。彼等には Kirmānī, Rāmānī, Muda-
ththir, Muhammad b. Bashār, Baqīlī, Bundādmahrī, Mu-
hammad b. Ishāq, Sabāhī, Ishāqī, Adharkānī, Shahrakī
Tahmādahnī, Zabādī, Shāhrūnī, Bundābakī, Khusrawī,
Zanji, Sbfarī, Shahyārī, Mīhrakī, Mubārakī, Ishtām-
harī, Shāhūnī, Furātī, Salmūnī, Sīrī, Azāddukhtī,
Barāzdukhtī, Mutṭalabī, Mamālī, Shāhākānī, Kajtī,
Jalīlī

等の各部族が居る。

⑥ 三地理書に列挙されている33部族の中の Rāmānī が Fārs Nāmāh では Shabān-
kārah 族の一部族として書かれクルド族とは別になっている (F. N. p166. cf. Le S-
trange, *Description*, p9-10)。又後述する zamm al-Kāriyān の首
長は Yaman 出身のアラブ人である (cf. *Ist*. p140-41)。

⑦ アラビアの地理学者達はフェールスを二つの気候帯に分ける。' Arrajān, Nūban-
jān, Kāzirūn, Khurrah (or Jirrah), Dārābjird, Furj,
Tārum 等を結ぶ線の北を寒地帯 ṣurūd, 南を暖地帯 jurum と呼ぶ (*Ist*. p 135-
6, I. H. p287)。

⑧ W. Ouseley, ペルシア語訳 Ibn Hauqal では khānāt と訳されている (*Ori-
ental Gesgraphy*, p83)

⑨ Fārs のと同名の zamm al-Bāzanjān が Iṣbāhān にあるが、これは Fārs
から移つたもので、本質的には Fārs に属す (*Ist*. p98-9. 145. I. H. p265 (180))。

⑩ この当時 Fārs に於いてスルターンと言えはまだアッパース朝カリフ乃至はその代行者を
指すものと思われる。

⑪ cf. B. de Meynard, *Dictionnaire Geographique*, art. on "Re-
mm". R. Levy; *The Social Structure of Islam*, p382.